

東日本大震災に伴う災害ボランティア活動報告書2011

がんばろう！日本 島根から東北の復興支援へ



陸前高田市
ガレキに立つヒマワリ



THE UNIVERSITY OF SHIMANE
公立大学法人 島根県立大学

活動の様子



2011年5月8日

郡山市ビッグパレットふくしまの炊き出し風景。避難者が列を作り、配給を待っていた。段ボール箱を切って作られたお盆が印象的だった。

2011年5月8日
郡山市ビッグパレットふくしまの救援物資置場。多くの物資がスタッフ、ボランティアによって商品ごとに整理され、避難されている方々に、受付を通して配給されていた。



2011年5月8日

郡山市ビッグパレットふくしまの横に建設中の仮設住宅。

プライバシーの保護のためにも早期の完成が望まれた。





2011年5月17～19日
石巻市渡波地区で家屋・
アパートの清掃を行った。
街の至るところに流された
家財道具と思い出の品々が積
まれ、そして運び出されてい
った。



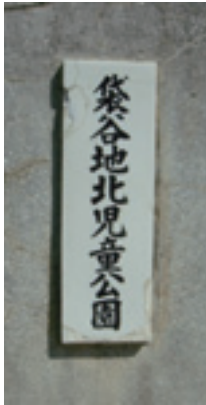
2011年5月24日

石巻市湊地区のアパート。
2階の半分ぐらいまで津波の被害があり、1階部分は壊滅状態。
各部屋の家財の持ち出しや泥だし、ヘドロの運搬を行った。



2011年5月24日

大学の授業でお世話になっている
浜田市三隅町・杖田さんからの寄贈
により、第2・第3クール合わせて
300kgのコメを石巻市へ届けた。
この日は、バスで自衛隊の駐屯地
に向かい、直接手渡した。



2011年5月25日～26日

石巻市水明地区にある児童公園は、重機が入ったために地面がボコボコになり、ガラス片や木片が埋まっているため、使用できない状態にあった。

地道な整地、危険物除去作業を行ったところへ、子供たちがやってきた。遊ぶ子供たちの姿を見て、疲れも吹き飛び、「明日も子供たちが安全に公園で遊べるようにがんばらなければ」という気持ちになった。

本当に子供たちには元気をもらった。

26日の朝、公園の入口に張紙があった。私たちの活動は人の役に立っているのだと実感できた。





2011年6月14日
日和山公園から見た、壊滅的な被害を受けた石巻市沿岸部の様子。

2011年6月14日
日和山公園の「命の道」。
津波発生時、多くの人々が日和山につながるこの坂道を登って、難を逃れたと聞いた。



2011年5月19日
石巻市社会福祉協議会の災害ボランティアセンターは、社協の建物も津波で流されたため、プレハブとテントで運営されていた。



2011年6月14日

石巻市住吉地区で駐車場に堆積した汚泥の除去作業を行った。

元は砂利の駐車場であった所に、約10cm～20cmの汚泥が堆積しており、ひたすら取り除く作業に追われた。

2011年6月15日

汚泥が入った土のう袋をトラックに積んで搬出した。土のうは、いずれ堤防等として役立てられると聞いた。



2011年6月16日

石巻市住吉地区で地域の方と共に、沢山のヘドロが堆積して水が流れなかった側溝の泥だし作業を行った。

2011年6月22日

石巻市住吉地区で植え込みのヘドロ撤去と側溝の泥だし作業を行った。



2011年8月25～27日

陸前高田市小友地区で、肥料として再生利用する牡蠣の殻とガレキとの分別作業を行った。





たくさんの出会いと笑顔
全国の仲間たちにありがとう！
いわてGINGA-NET



— 目 次 —

活動の様子(カラー写真集)

学長挨拶

1. 学生代表挨拶	1
2. 寄稿	4
3. 派遣活動の概要	10
4. 各クールの派遣活動と学生の感想	12
5. 派遣活動以外の取組	39
6. 学生ボランティア活動支援金募金の報告とお礼	42
7. 学生から	44
8. 教員から	51
9. 事務局から	56

参考

資料集(目次)	63
---------------	----



マスコットキャラクター
「オロリン」

学長挨拶

東日本大震災の発生から早一年になろうとしている。

この間、島根県立大学は、島根県社会福祉協議会と密接に連携しながら、学生、教職員の自主的な発意による多数の災害ボランティアを東日本の被災地に派遣してきた。

東日本大震災は、未曾有の被害を東日本の太平洋沿岸地域にもたらし、地域社会を破壊し、多数の尊い命が犠牲になった。被災地が復興し、被災者の生活が再建されるには、全国民の一致した支援が欠かせない。

本学は被災地から路線距離で 1,500km 以上の遠隔地にあり、しかも、規模の小さい大学であるが、復興支援に向けて私達に出来ることを地道に継続実施して来た。そのことが、被災者を励まし、被災地の復興を後押しすることに繋がると確信しているからである。今後、より一層支援の輪が広がることを願い、私達がこれまで取り組んできた災害支援ボランティア活動の記録を整理し、ここに、公表することにしたものである。

昨年 3 月 11 日、震災当日の午後、会議中の私達に、巨大地震の発生とそれに伴う大津波の発生を知らせるニュースが伝えられた。直ちに会議を中断し、3 時 30 分頃からテレビの中継映像に見入った。宮城県の名取市が津波に飲み込まれていく様子がリアルタイムで中継されており、何が起きているのか、直ちには理解できず、キツネにつままれる思いであった。私自身、宮城県が故郷であることもあり、目前で進行する被災の様子は、私にとって筆舌に尽くせない程の衝撃を与えるものであった。

その後、徐々に、震災の実態が明らかになるにつれて、地震のマグニチュードは 9.0、震度は 7.0、そして、地震による津波は地域によっては 30m を超える高さに達していることが分かって来た。何れも、想像を絶する規模であり、結果として、岩手、宮城、福島の沿岸地域は強烈な地震による揺れと 4 階建てのビルをも飲み込むほどの巨大津波に襲われ、死者、行方不明者は合わせて 2 万人に達する大災害となった。地域によっては、殆どの家が流されただけでなく、港湾、道路、橋、鉄道、病院、役場まで、津波に襲われ、壊滅状態となってしまった。

地震と津波による直接的な被害に加えて、津波によって東京電力福島第一原子力発電所の原子炉が冷却電源を失い、大量の放射性物質を環境中に放出するという重大事故をも惹き起すことになった。しかも、震災後、長期間にわたって事故収束の見通しも立っていない状態が続き、多くの福島県民が住み慣れた故郷から避難せざるを得ない事態が固定化されている。我が国のエネルギー政策についても、必要な電力の 50% まで原子力発電を拡大するとの政府方針は抜本の見直しをせざるを得ないだろうし、原子力発電そのものについても、見直さざるを得ないことになるだろう。そうなれば、我々の生活のあり方、日本の産業構造にまで大きな影響が及び、まさに、社会的枠組みの大変革、パラダイム・チェンジが求められることになるだろう。

このような状況を受け、高等教育研究機関である本学には何が求められるのか。また、我々は大学としてこのような状況にどう対応してきたのか。

本学では、先ず、第一に、震災直後、直ちに、学生、教職員全員の安否確認を行い、全ての構成員が無事であることを確認した。合わせて、学生の中で、被災した者はなかったかも確認したが、大きな被害を受けた学生は認められなかった。

その上で、本学では被災者の方々に対する支援活動に継続的に取り組むこととし、直ちに、3キャンパス一斉に義援金の募金を行い、お寄せ頂いた義援金は日赤を通じて被災地にお届けした。さらに、学生を中心として自主的災害ボランティア活動に取り組むこととし、大学として、全面的にバックアップすることとした。

大学としては、ボランティア活動に参加する学生諸君の安全確保が重要であり、そのために必要な保護者の皆さんからの了承確認、島根県社会福祉協議会との連絡・調整、現地災害ボランティア・センターとのマッチング、移動手段や宿泊施設の確保などの後方支援に万全を期すとともに、職員、教員を派遣することによって、現地の具体的状況の把握にも努めた。

その結果、災害ボランティア活動の嚆矢となった「浜田を明るく照らし隊」の災害ボランティア活動への参加をはじめとして、島根県社会福祉協議会「島根県災害ボランティア隊」への継続的参加によって、全てのキャンパスから、合わせて延べ152名の学生、教職員のボランティアが福島、宮城、岩手の被災地に入り、各種の災害支援活動に携わった。小規模大学であるにもかかわらず、本学から参加したボランティアは島根県社会福祉協議会が派遣する災害ボランティア隊の約半数を占めることになった。現在も、厳冬期に入り、また、学期末の慌ただしい状況下にも拘らず、学生諸君が災害ボランティアとして宮城県で支援活動を継続中である。

これらの本学学生諸君の活動は、他の災害ボランティアや地元関係者の皆さんから、非常に高く評価され、感謝されている。また、大学に戻ってきた学生諸君は、例外なく、現地の様子をしっかりと観察して来ており、災害支援活動の重要性を深く認識するようになっている。被災者の皆さんの厳しい現実に関わり、また、3～7日間にわたる過酷とも言える災害ボランティア活動の結果、社会の現実を我が事として受け止め、この現実に対して、自分は何が出来るのか、また、自分は何をしなければならないのかを真剣に考えるようになっている。災害ボランティア活動に参加した学生諸君が、人間として大きく成長していることを実感させられている。学生諸君の災害支援に対する熱い思いと一人の人間として成長していく姿に、深い感銘を受けるとともに、心から敬意を表する次第である。

この度の震災は、まさに、未曾有の規模と内容であり、被災地の復興には全国民の一致協力の下、長期的な支援の取組が必要である。本学から直接貢献できる力は小さいかもしれないが、そのような小さな力であっても復興への熱い思いとともに、全国津々浦々から被災地に向けて集中することが、被災地復興、被災者支援にとって最も大事であると考えている。今後も粘り強い支援活動を継続して行く決意である。

最後に、この度の東日本大震災で犠牲になられた多くの方々のご冥福をお祈りし、「東日本大震災に伴う災害ボランティア活動報告書2011」刊行に当たってのご挨拶としたい。



島根県立大学
島根県立大学短期大学部
学長 本田 雄一

1. 学生代表挨拶

気づき。島根県からの第一歩

浜田キャンパス学友会

第12期執行委員長 堀 将大



時は春季休業期間。実家に帰省していた私は、テレビを通して見る東日本での惨劇に、瞬きを忘れた。今後も、永久的に語り継がれるであろう3.11の悲劇。この日を期に、どれほどの人が迷い、苦しみ、悲しんだことであろうか。その情報は日本国内をはるかに超え、世界でも大きなニュースとなり、図り切れない規模となった。

これほどまでに大きく、未曾有の被害を受けたにもかかわらず、そこで発揮された日本人らしさは、世界を驚かせた。混乱や暴動が起こるどころか、整列して物資を受け取る人々をはじめ、譲り合う人までいた。「日本人らしさ」が、大きく世界でも称賛される機会となったと言えるであろう。

日本人らしさの一つに、「謙遜すること」があげられる。一方が「すみません」と言えば、もう一方も「こちらこそ、すみませんでした」と返す。「ありがとう」と言えば、「こちらこそ、いつもありがとう」と言う。日常生活で、何気なく行なわれてきたこの文化が、国民のなかで、いっそう強く見直される機会となった。少なくとも、私を始めとする災害ボランティア派遣チームの学生は、痛感していることであろう。

現地では、これまでに見たことがない光景が広がっていた。見渡す限り続く、砂の色一色に染められたまち。泥を巻き上げながら襲ってきた、汚れた海水の跡が残った校舎の3階。窓ガラスが何枚も割れた家や、直立したまま残された自動車。一台も作動していない信号機。水産加工場から流されてきたであろう生魚、そこに群がる大量の虫、鼻を刺す強い臭い。すべての光景が日常にはない異空間のものであり、非日常の世界であった。非日常の世界で活動させていただき、「少しでも東日本の力になりたい」と学生なりに感じた。

島根県への帰着後、いつも通りの光景に不思議と違和感を覚えた。蛇口をひねれば好きなだけ水が出る。お手洗いも我慢することなく済ませられる。調理の際にはガスが使える、携帯電話を使えば誰とでも連絡が取れる。家中どこを見ても、海の砂などあるわけがない。これが普通と感じていた。自分が現地に行くまでは。

現地で見た非日常の光景は、当たり前前の生活がどれほどありがたいものなのかを気付かせるきっかけとなっていた。同時に、感謝することの大切さを感じる機会でもあった。両親が何気なく送ってくるメールも、実はとてもありがたい。友達と共に過ごす時間も、いつもお世話になっている職員の方や市民の方の存在も、なくてはならない。そのようなごく当たり前前の時間こそ、当たり前前の存在だからこそ、「ありがとう」と伝えるべきである。それだけで、お互い幸せになっていく。

この震災を通して、日本人らしさを再認識し、日々の生活に感謝すべきだと意識することが肝要である。身近なことへの気づきこそが、少しでも早い復興に向けた、島根県からの第一歩かもしれない。

災害ボランティア活動に参加して

松江キャンパス
総合文化学科
2年 辻畑 裕子



私は夏季休業期間を利用して、岩手県釜石市の応急仮設住宅においてボランティア活動を行いました。何か力になりたい、自分にもできることはないだろうかと思い、参加を決めました。活動内容は、応急仮設住宅において住民のご近所づきあいをお手伝いする、住民のコミュニティをつくるお手伝いをする事です。

仮設住宅の一室を借りて「お茶っこサロン」を開きました。この場所をきっかけに住民のみなさんが話をして友達を作ってほしい、つながるきっかけの場であればと思い、全国の学生と活動しました。避難所から応急仮設住宅に移っても、なれない環境下での生活に不安を抱えている人もいます。自分がボランティアとしてどれだけ住民の人に寄り添うことができるか、思いを受け止めることができるかが大切だと感じました。

写真：「お茶っこサロン」準備の様子



松江に帰ってきてから、遠くから何かできることはないかを考え、飛鳥祭では災害ボランティア報告会を開催しました。私たちが実際に行って、感じたこと、被災地の現状を多くの人に伝え、継続的な支援が必要であることを知ってもらおうという目的がありました。「伝える」ことの難しさと大切さを学びました。

私は岩手に行き、被災者としてではなく一人の人として住民の皆さんと出会えたこと、同じ思いを持った全国の学生と出会えたことが一番嬉しく思います。年末には「旧小佐野中仮設団地にも自治体ができる。自治会長は〇〇さんだっ。」と同じ活動場所の仲間から情報が入りました。夏の活動が一つの形となったことをその時あらためて実感しました。

今回の活動は結果がすぐに見えるものではありませんが、引き継ぎをしながら全国の学生が継続的に支援することで、力になれることがわかりました。この活動は、学生にしか、学生だからできることだと強く思います。

現地の人のニーズに合わせて支援活動のやり方は変化していきます。震災から10カ月がたった今でも、支援は必要とされていると思います。この経験を伝えながら、またこのような機会があれば、ボランティア活動に参加したいです。

したいという意思が次に繋がる

出雲キャンパス学生自治会
会長 安部 泉美



2011年3月11日東日本大震災が起こり、多くの被害がもたらされました。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

日本各地で被災地に向けて様々な取り組みを行っているなか、本キャンパスでもボランティア活動を行いました。内容は募金活動やボランティア派遣、ボランティア活動の報告会などです。

私自身も昨年9月にボランティアとして岩手県に行きました。現地の様子を知りたい、現地の方と関わりたい、何か出来るのではないかと漠然とした気持ちから応募しました。被災地という場のイメージがわからず、恐怖心や不安感を抱いたり、観光気分で応募してはいないか、こんな思いでは失礼ではないかと考えたりしていました。「ボランティアに行き誰かの役に立ちたい」と断言する友達に尊敬の念を抱き、迷っている自分を情けなくも感じました。

しかし、岩手県に到着し視察する中で、プロジェクトを運営している現地の学生の姿勢や思いを知り、また仮設住宅に暮らす方々と触れ合ったことによって私の気持ちに変化が起こりました。この場所で、ここの人達のために何か役に立ちたい、笑顔にしたいと心から思いました。

同じボランティア活動をしても、私と同じ様に感じる方ばかりではないと思います。でも、何か行動を起こしたことによって価値観や世界観は確実に変わり、貴重な経験となります。また行きたい、他の人にも行って欲しいと次へと引き繋がれるきっかけとなると思います。

また最後に、ボランティア活動が成り立つのは送り出してくれる学校や受け入れてくれる現地、そして同じ目的を持った人々がいたからだということに感謝したいと思います。



東日本大震災 島根県立雲出ボランティア隊 プランニングチーム 平成23年8月1日～8月6日



写真：いわて GINGA-NET 第6期
参加者と記念撮影

2. 寄稿

ボランティアに励まされて

宮城県石巻市のアパート大家

はせくら

支倉 清・紀代美

宮城県石巻市は北上川の河口に開けた町である。今度の大津波で、基幹産業の漁業・水産加工業は壊滅的な被害を受けた。私どものアパートは石巻漁港から500メートルほど北に位置し、アパートの南側（海側）には魚の冷凍庫や水産加工場が林立している。アパートの入居者にも漁業や水産加工に携わる人が多かった。

木造二階建てのアパートは、二階床上まで達する津波に襲われた。津波は一階南側のガラス戸を打ち破り六畳二間を突き抜け北側の壁をも破壊して通り抜けた。室内には、家財道具とともにサケ、カツオ、ヒラメなどの魚が散乱し、その上に海底のヘドロが10センチメートル余り堆積した。

アパート入居者の安否確認を済ませた後、私どもは途方に暮れた。着のみ着のまま避難した入居者は避難所や友人宅などでその日の暮らしに追われていた。かれらにアパートの片付けをする余裕はなかった。日ごとに暖かくなり、部屋の中で魚は強い異臭を放つようになった。触れると魚の身がドロッと崩れてしまう。汚くてとても正視することが出来なかった。役所に相談しても清掃業者に声を掛けても、だれも助けてはくれなかった。

島根県のボランティアさんたちが来てくださると聞いたとき、うれしい反面、とても不安になった。水も出ない、トイレも使えない、魚の腐った異臭の中で、ボランティアさんたちはどんな顔をするだろうか。ほんとうに片付けをお願いしていいのだろうか。

当日9時30分、ボランティアさんたち29人が到着した。大学生から停年退職した60歳代の方まで年齢はさまざまだった。29人は挨拶もそこそこに早速アパートの片付けに取りかかってくださった。「くさい」「きたない」という人は一人もいない。スコップもガラ袋も不足する中、腐敗した魚を絨毯や戸板にのせて、黙々と運び出してくださるのだった。防臭マスクをしているのはわれわれ二人だけだった。申し訳なくて身の縮む思いだった。

作業量は膨大だった。風呂場や台所に溜まったヘドロは排水口を塞いでいた。水で満杯になった衣装ケースは重かった。アルバムは注意深く取り分けられた。全員が汗びっしょりになりながら、昼食時間をはるかに過ぎて頑張ってくださいました。

お別れするときボランティアさんから「今日は有難うございました」と挨拶されて、涙がどっとあふれた。胸がいっぱいになりお礼の言葉が出なかった。その代わりに一人ひとりと握手をさせていただいた。皆さんを姿が見えなくなるまで見送った。どんな苦勞があっても、石巻を復興しようと心に誓った。

学生の力を被災地に

岩手県立大学
学生ボランティアセンター

あきら
早川 陽

私たちボランティアセンターは、今回の東日本大震災において様々な支援活動を展開してきました。震災直後の陸前高田市や釜石市での災害ボランティアセンター運営支援に始まり、ボランティアバス派遣、各種イベントなど学生の強みを活かして継続的に取り組んでいます。

このような活動を実践していく中で、学生ボランティアセンターのスタッフだけでなく、全国にいる「何か力になりたい」という気持ちを抱いている学生の力・想いを形にしたいと考え、「いわて GINGA-NET プロジェクト」が始動しました。

原点にあるのは、あくまで住民のニーズです。何度も現地に足を運び対話を通してニーズをくみ取り、そこに学生の想いを重ね合わせていくというとても丁寧なプロセスに基づく活動です。

一週間という決められた期間、岩手で活動することだけが GINGA-NET ではありません。参加することで感じた空気、地域をとらえる視点、住民との関わり、これらすべては自分の地域に戻って、その地域を再考していくことにつながると考えています。

夏の銀河終了後、関西を拠点とする「かんさい GINGA」や、多くの大学で、参加学生を中心とするボランティアの組織化の動きが活発化しています。全国の学生の防災のネットワークの拡がりを実感しています。

GINGA-NET は冬・春とその時々状況に合わせて継続して展開していきます。皆さんの支えなくしては成り立ちません。今後とも多くのご支援よろしくお願ひします。



写真：仮設住宅入居者の方と対話する学生たち

震災ボランティアに参加して 見たこと、感じたこと

県民ボランティア隊
(第1・第5クール)
安藤 珠美

震災のニュースが流れる中で、募金以外に何か私にできることはないだろうかという思いを募らせているときに島根県社協のボランティア募集を5月の連休前の朝のNHKニュースで見えすぐに申し込みを致しました。

まず第1クールでは石巻の牡鹿半島にある竹浜という小さな漁村に行きました。震災後2カ月が経とうとしていましたが、ほとんど手つかずの状態、高齢者の方たちはあまりにも膨大な被害を前にしてまだ片づける気力がないような状態でした。私は、思うように進まない作業と、まだ見つかっていない不明者の方たちがおそらく海の中で眠っておられるであろうと考えると、気持ちも沈んでくるようで、どうしようもない悲壮感に陥ってしまいました。

今までの人生でこれ程までに人間の死や自然の力の猛威など一度にどっと恐怖感を感じたことはありませんでした。想像していた以上に凄まじい状況の中に身を置いて、自分自身の命に対する考え方や生き方の甘さまで厳しく問い詰められたような感じでした。

そんな中、すぐそばの高台に氏神さまを祭っている小さな社と大きな榎の木が、この小さな漁村を見下ろすように立っていました。津波が来るずっと前から、そしてこれから先もまた元の漁村に戻る様子を何年も何年も見守っていくのでしょうか。

しかし陸前高田の方では、せつなく命が助かったのに自殺される方が多いと聞いて、復興なんて考えられない、未来が見えない気持ちがすごくよくわかり、3日間の作業で自分のできたことがあまりにもわずかであったことのせつなさも加わって、脱力感でいっぱいになりました。

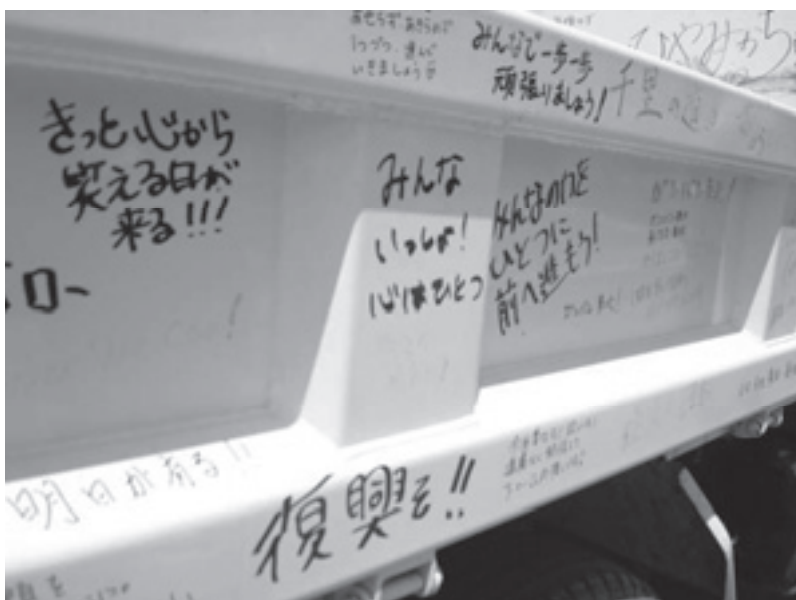
2回目の第5クールでは県大生の方たちもご一緒に、作業は住宅街の炎天下の中で悪臭もひどくたいへんでしたが、学生のみなさんの積極的な行動や考え方に元気をもらいながら頑張ることができました。小学生の女の子が、側溝の掃除をしている私たちの姿に感動してくれて、「自分も皆さんのような大人になりたい」という内容のお手紙を私たちに書いてくれるという温かい触れ合いもあり、疲れを癒された出来事でした。

私は今回2度東北に行ってきましたが、写真は全く撮りませんでした。しっかりと自分の目に焼き付けて帰ろうと思ったのですが、1枚だけ携帯に撮った写真があります。それは、第5クールで石巻の町を歩いている時に見つけたツツジの花です。汚泥の中で葉っぱはほとんどなく、花だけが1つの木に1つ2つ弱々しく咲いていました。

みなさん、その光景を想像してみてください。私はその花を見た瞬間、あまりにも悲しい気持ちになり、壊れた家屋や津波で流された無残な光景と同じくらいショックを受けました。そして、生き延びながらも自殺される方たちのことが思い出されました。このツツジの花は、はたして花として咲きたかったのだろうか？という思いと、また一方そうではなく汚泥の中でも頑張っただけで咲いている姿にその強さを感じて応援してあげたいと思う気持ちもあります。

みなさんはどう思われるでしょうか。私は今の生活の中で時々そのツツジの花を思い出しています。私たち人間もこのツツジの花と全く同じで、自然の力に逆らえず、与えられたこの生命力をできる限り自然の中で、そして自然と共に自然を大事にして生きていかなければならないし、そうして生きていきたいと思っています。

今を生活している私たち人間に、自然災害や今回の原発の問題が、これからの未来をどう生きていけばいいのかを根本的に考えないといけないのだと問いかけていると思われます。私はそのことを考える時にはっきりとした答えはまだ見つかりませんが、第1クールの竹浜を見下ろしていた柵のこと、第5クールのツツジの花のこと、そして今回のボランティアで知り合った石巻の方たちとの心の触れ合い、一緒に同じ作業をして気持ちを共にした学生の方たちを思い出して、本当に大事な物は何だろうかと考えます。そして、それは人と人のつながりだと思います。それが失われないような未来がこれから先ずっと続くことを願いたいと思います。そして、まだまだ復興に向けてたくさんの支援が必要です。何かまた私にできることを見つけて、これからも生きていきたいと思っています。



写真：第5クールの土砂運搬トラックに書かれた寄書

写真：第5クールの土砂運搬作業



後輩達との災害ボランティア

松江市消防本部 松江市北消防署
井上 雅博（浜田キャンパス第三期生）

2011年3月11日、未曾有の大災害「東日本大震災」が発生。次々に報道される被災地の姿に、「何か自分に出来ることはないか」。災害ボランティアとして、過去に被災地で活動した経験があり、今回も被災地へ出向き「復興のために力になりたい」と考えていた。

そんな折、東日本大震災が発生してから約2ヶ月後の5月に「島根県災害ボランティア隊」として、宮城県石巻市に災害ボランティアに行かせていただいた。偶然にもメンバーの中に母校の学生が十数名もおり、「人の役に立ちたい」と考え行動に移せる学生がたくさんいることに嬉しく思った。また、彼らの熱い思いに自分の学生時代の活動を思い出した。

2004年10月23日、最大震度7を記録した「新潟県中越地震」が発生。当時、島根県立大学3回生だった私は、学内の仲間や島根大学の学生と協力し、募金活動や被災地で災害ボランティアとして活動した。被災された方々や全国から駆けつけたボランティアの方々と触れ合い、共に活動していく中で、ボランティアの大切さや社会に貢献することの喜びなど様々な事を学んだ。今の仕事である消防を志すきっかけとなったのもその時であった。

学生達との被災地での活動は3日ほどであったが、私が見た限り彼らはすばらしい活躍をしてくれていたと思う。初めて見る被災地に、初めての災害ボランティア、戸惑いや不安、被災地の現状と自分の置かれている立場など、考えさせられる事が多々あったと思う。中には過酷な環境下での作業もあった。だが、彼らはそんな困難にも怯む事なく「学生らしさ」を前面に出しながら、黙々と作業をこなしていた。

そんな学生達の姿が周りのみんなの頑張る励みにもなっていたと感じた。特に学生の若さ、元気、笑顔、明るさが被災者の方々のみならず、一緒に活動していたメンバーにも力を与えてくれたと思う。先輩として学生を引っ張って行こうと思っていた私も、いつしか学生に引っ張られていたような気がする。

今回、災害ボランティアを経験した学生も、私が当時そうであったように、活動を通して様々な事を学び、感じ取り、成長したのではないだろうか。活動後の学生達を見ると、表情や言葉の一つ一つに成長の跡が垣間見えた。そんなたくましい学生達と一緒に活動できたことを光栄に思う。島根でもし災害が起こったとしても、今の彼らなら率先して活動してくれることだろう。学生達には大人にはない行動力やパワー、無限の可能性、たくさんの魅力があると改めて感じた。被災地に思いを馳せながら、今後の彼らの活躍を期待する。

私自身においても今回の災害ボランティアは大変貴重な経験であった。今回の活動で得た課題や教訓を今後の消防業務に活かし、市民の安心・安全を全力で守っていきたい。また、被災された方々の本当の笑顔を見る日まで支援活動を継続していきたい。

最後になりましたが、このような活動の機会を与えて頂いた島根県社会福祉協議会の皆様に感謝するとともに、本震災で亡くなられた方々のご冥福と被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

社会福祉協議会の災害復旧支援

社会福祉法人島根県社会福祉協議会
事務局長 山根 正己

東日本大震災は地震に引き続く津波と原子力発電所事故によって東北3県を中心に甚大な被害をもたらしました。社会福祉協議会では災害発生直後から全国及び県内市町村社協、島根県、日本赤十字社島根県支部等と連携して被災地支援を行って来ました。災害ボランティアセンターの運営や緊急の生活福祉資金貸付などの被災地社協の応援です。

島根県社協は、県内市町村社協と共同して石巻市など宮城県内の被災地を担当しました。7～9日間の日程で8月末までに48名の職員を派遣しましたが、当分の間は大阪梅田へ集合し近畿・中四国の職員がいっしょにチャーターバスで山形県側から向かうという交通事情でした。また、食料、水、寝袋などは全て持参しなければならない状況でした。

こうした中、県民の方から「災害ボランティアに行きたいがどうすればいいか」という問い合わせが多く寄せられましたが、当面は待機してもらい、被災地からの災害ボランティアの情報を提供することにしました。そして、現地の社会福祉協議会（災害ボランティアセンター）との調整の結果、ボランティアの減少が見込まれる5月の大型連休明けから島根県災害ボランティア隊を派遣することになりました。

派遣に当たっては、隊員の健康と安全確保を第一に検討し、1隊25名程度、バスによる団体行動で4泊5日（うち2車中泊）、宿泊費と飲食費は参加者負担というプランになりました。相当ハードな計画でしたが、島根県立大学の学生さんをはじめたいへん多くの県民に応募いただき、これまでに13隊323名を派遣することができました。

隊員の皆さんは危険を伴う、汚い、そして場所によっては腐敗臭の中で黙々と整然と活動され、被災地では高い評価をいただきました。後日わざわざお礼に来県された方もあったほどです。また、片道17時間もかかるバスにたくさんの資機材を搭載してもらったバス会社、そして、ボランティア派遣費用に充ててほしいと多くの個人・企業から寄付をいただきました。隊員の方はもとより、さまざまな協力をいただき、とてもありがたく思っています。

帰県した隊員の皆さんからは、被災地を目の当たりにして衝撃をうけたことや、作業を体験して自分の無力さを痛感したということ伺いました。同時に被災した人たちへの思いやり、機会があればまたボランティアに参加したいという前向きな気持ち、若い隊員からは自分自身のこれからの生き方や心構えを堂々と発表されるのを聴き、とても頼もしく思いました。幅広い年代のボランティア隊員がそれぞれ若さや経験を生かし、補い合ってチームとして活動し、極めて短期間のうちにお互いをリスペクトする感想が多くありました。

多くの方が災害ボランティアをきっかけに、お互いを慮る、助け合うことを再認識し、そしてそれを実行することに繋がればと願うものです。

3. 派遣活動の概要

- (1) 5月の連休明け、浜田キャンパスの学生たちが先遣隊という位置付けで、NPO「浜田を明るく照らし隊」の活動に参加した。
- (2) 5～6月には、島根県社協主催の「島根県災害ボランティア隊」が計6クール石巻市へ派遣され、内4クールに学生教職員が参加した。
- (3) 8月には島根県社協主催の「島根県災害ボランティア隊」が計2クール陸前高田市へ派遣され、いずれも学生が参加した。
- (4) 8～9月には島根県社協主催により、「いわてGINGA-NETプロジェクト」に計3クール派遣され、他の学生とともに多数参加した。
- (5) 10月には島根県社協主催の「島根県災害ボランティア隊」が計2クール南三陸町に派遣され、学生職員が参加した。

区 分	活動期間	全参加者数	3キャンパスの学生計	浜田Cの学生	松江Cの学生	出雲Cの学生	備 考
(1) 郡山市 「浜田を明るく照らし隊」		7	7	7	0	0	男5女2
活動場所: 福島県郡山市 活動内容: 避難所での炊き出し	5月6日(金) ～10日(火)	7	7	7			
(2) 石巻市 「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催: 一般県民を対象)		144	42	41	0	1	男30女12 ほかに 教職員2
活動場所: 宮城県石巻市 活動内容: がれき撤去、 被災家屋の片付け等	第1クール 5月9日(月) ～13日(金)	21					
	第2クール 5月16日(月) ～20日(金)	29	12	12			ほかに 職員1
	第3クール 5月23日(月) ～27日(金)	28	16	16			ほかに 教員1
	第4クール 6月6日(月) ～10日(金)	20					
	第5クール 6月13日(月) ～17日(金)	21	6	5		1	
	第6クール 6月20日(月) ～24日(金)	25	8	8			
(3) 陸前高田市 「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催 プランⅠ: 一般県民を対象)		58	23	10	5	8	男12女11
活動場所: 岩手県陸前高田市 活動内容: がれき撤去、 被災家屋の片付け等	第1クール 8月17日(水) ～21日(日)	29	11	4	2	5	
	第2クール 8月24日(水) ～28日(日)	29	12	6	3	3	
(4) 住田町他 「島根県災害ボランティア隊」(いわてGINGA-NET) (島根県社協主催 プランⅡ: 学生を対象)		70	61	27	18	16	男15女46 ほかに 職員5
活動場所: 岩手県内被災市町 (大槌町、釜石市、大船渡市、 陸前高田市、住田町ほか)	第1クール 8月17日(水) ～23日(火)	14	11	6	5		ほかに 職員2
活動内容: 仮設住宅でのサロン活動、 子供向け学習支援活動等	第2クール 8月31日(水) ～9月6日(火)	27	24	4	7	13	ほかに 職員2
	第3クール 9月14日(水) ～20日(火)	29	26	17	6	3	ほかに 職員1
(5) 南三陸町 「島根県災害ボランティア隊」 (島根県社協主催: 一般県民を対象)		51	19	17	1	1	男11女8 ほかに 職員1
活動場所: 宮城県南三陸町 活動内容: がれき撤去、 被災家屋の片付け等	第1クール 10月12日(水) ～16日(日)	23	4	3	0	1	
	第2クール 10月19日(水) ～23日(日)	28	15	14	1	0	ほかに 職員1
合 計		330	152	102	24	26	男73女79 ほかに 教職員8

【参加学生内訳、（ ）内は実人数】

	1年生		2年生		3年生		4年生・専攻科		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男女計
浜田	3 (3)	8 (6)	19 (16)	11 (10)	42 (29)	11 (11)	4 (3)	4 (4)	68 (51)	34 (31)	102 (82)
松江	2 (2)	16 (16)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	21 (21)	24 (24)
出雲	0 (0)	12 (12)	2 (2)	6 (6)	0 (0)	3 (3)	0 (0)	3 (3)	2 (2)	24 (24)	26 (26)
計	5 (5)	36 (34)	22 (19)	22 (21)	42 (29)	14 (14)	4 (3)	7 (7)	73 (56)	79 (76)	152 (132)
	41 (39)		44 (40)		56 (43)		11 (10)		152 (132)		



4. 各クールの派遣活動と学生の感想

(1) 「浜田を明るく照らし隊」

主 催：浜田を明るく照らし隊（隊長：村武まゆみ）
場 所：福島県郡山市、双葉郡
期 間：2011年5月6日（金）～10日（火）

【行程表】		
5月6日（金）	7：50	浜田市役所集合
	8：00	出発式
	8：20	浜田市役所出発～レンタカーで移動
	14：00	兵庫県佐用町着
	14：00～16：30	講習
	18：00	宿舎着
5月7日（土）	9：00～22：00	兵庫県出発～レンタカーで移動
	22：00	福島県郡山市着（宿泊）
5月8日（日）	8：00	郡山駅集合（ハートネットふくしま合流）
	8：30	ビッグパレットふくしま着
	9：00～18：00	ボランティア活動
	19：00	宿舎着
5月9日（月）	8：00	宿舎発
	9：00～16：00	ボランティア活動
	16：30	ビッグパレットふくしま発～レンタカーで移動
	20：00	新潟県着（宿泊）
5月10日（火）	8：00	新潟県発～レンタカーで移動
	23：30	浜田着

主な活動：兵庫県佐用町水害講習、避難所炊き出し・下拵え、福島県双葉郡視察

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田 3年	仲宗根 大輔	ナカソネ ダイスケ	男	副代表
2	浜田 3年	西岡 仕琦	ニシオカ シキ	男	
3	浜田 3年	堀 将大	ホリ マサヒロ	男	代表
4	浜田 2年	門上 貴	カドカミ タカシ	男	記録
5	浜田 2年	坂本 出	サカモト イヅル	男	
6	浜田 1年	奥原 有希恵	オクハラ ユキエ	女	
7	浜田 1年	谷本 由依	タニモト ユイ	女	



【2011年5月8日（日）～9日（月）】

・避難施設となっていた、福島県郡山市「ビッグパレットふくしま」には、5月9日の時点で776名が避難されていた。施設内は非常に静かであり、ボランティアである自分が、この場にいてもいいのかと

思うほど、静まり返っていた。

・施設の1階では、2メートルほどの衝立とカーテンによって家族ごとに区切られていた。しかし、2階に移動してみると、1.5メートルほどの段ボールのみで、仕切りが作られていた。避難施設内にも格差は存在しており、満足のいく生活環境ではないことが感じられた。

・炊き出しに関しても、避難されているすべての方に行き渡っているわけではなく、安定した供給ができていないとは言い切れない。ボランティアの数において、安定した供給を行ない、少しでも早い復興に向けて、様々な形で支援させていただくことの重要性を感じた。



写真：「浜田を明るく照らし隊」メンバーによる炊き出しの食材下拵えの様子

下拵えされた食材は、配送先ごとに袋詰めされて翌日の炊き出しに使用される。



写真：衝立で仕切られた避難施設の様子



(2) 石巻市「島根県災害ボランティア隊」

主 催：社会福祉法人島根県社会福祉協議会（会長：今岡義治）

受 入 先：石巻市災害ボランティアセンター

場 所：宮城県石巻市

期 間：第2クール 2011年5月16日（月）～20日（金）

第3クール 2011年5月23日（月）～27日（金）

第5クール 2011年6月13日（月）～17日（金）

第6クール 2011年6月20日（月）～24日（金）

【行程表】*各クール共通

第1日（月）	10：00	浜田キャンパス出発～県大公用車で移動
	14：00	いきいきプラザ島根着（受付）
	14：45	出発式
	15：00	いきいきプラザ島根出発～大型バスで移動（車中泊）
第2日（火）	8：00	石巻市災害ボランティアセンター着
	9：00～16：00	ボランティア活動
	17：30～	宿舎着(食事・宿泊)
第3日（水）	7：30～ 8：30	石巻市災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～16：00	ボランティア活動
	17：30～	宿舎着(食事・宿泊)
第4日（木）	7：30～ 8：30	石巻市災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～13：00	ボランティア活動
	13：00～17：00	石巻市災害ボランティアセンターへ移動・手続き等
	17：00	石巻市を出発 ～大型バスで移動（車中泊）
第5日（金）	9：30	いきいきプラザ島根着
	10：00～11：00	解団式
	11：00	いきいきプラザ島根出発～県大公用車で移動
	15：00	浜田キャンパス着

◆第2クール

主な活動：家屋の清掃と泥だし、アパートの清掃と泥だし、側溝の泥だし

	キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	4年	富岡 秀行	トミオカ ヒデユキ	男	
2	浜田	3年	新井 徹	アライ トオル	男	
3	浜田	3年	糸山 大樹	イトヤマ ダイキ	男	
4	浜田	3年	高田 昭徳	タカタ アキノリ	男	リーダー
5	浜田	3年	仲宗根 大輔	ナカソネ ダイスケ	男	
6	浜田	3年	西岡 仕琦	ニシオカ シキ	男	
7	浜田	3年	堀 将大	ホリ マサヒロ	男	
8	浜田	2年	加藤 泉樹	カトウ ミズキ	女	
9	浜田	2年	坂本 出	サカモト イヅル	男	
10	浜田	2年	西野 沙綾	ニシノ サアヤ	女	サブリーダー
11	浜田	2年	増渕 翔	マスブチ ショウ	男	
12	浜田	1年	谷本 由依	タニモト ユイ	女	
13	浜田	職員	松井 健	マツイ ケン	男	同行



【2011年5月17日(火)11:00～16:00】

・被災地に近づき、バスの中から徐々に被害を目にした時の衝撃は大きかった。高速道路から見えた、津波によって運ばれてきたガレキや船や流木が畑などに多く残っている光景は、TV で見た以上のショックを受けると同時に、復興はいつになったらできるだろうと思った。しかし、現地の人達はそれぞれが前を向いて復興へ向けて動き出していた。小学生や中学生、高校生が学校へ行き、社会人の方も頑張っておられた姿は忘れないと思う。今日の活動は16人でやっと一軒を終わらせることができた。一人一人は小さな力だが、こうして力を合わせることで、復興を支援していきたい。

・民家に「これでもか!」というほど大量に溜まった土砂を撤去している時、「本当にここは民家なのだろうか。海の砂がこんなところにまで…」と、信じられない気持ちになりました。作業中、粉塵が舞い、なんとも言えない腐敗した卵のような臭いがしていました。気温も高く、長袖長ズボンに帽子・ゴム手袋・長靴・軍手・マスクという頭がクラリとする環境での作業でした。じっと見ておられた、私たちが掃除をさせていただいた民家の方。撤去されていくぬいぐるみや衣類、思い出の品を悲しい目で見えていたお子さん方を見た時、思わず作業をすることをためらいました。私たちが運んでいく家の中にある物はその家に住んでいた人の思い出の品々であり、本当に大切な物ばかりなのだ改めて感じました。

・予想をはるかに超える現実が広がっていた。町は砂ぼこりが舞い、道路は整備されてはいたが、その両サイドにはガレキが山積みになっていた。その光景は、日頃ニュースで見なれてははずではあったが、それを実際この目で見ると言葉を失ってしまった。震災が発生してから2ヶ月が経過していたにもかかわらずだ。ボランティアの手が行き届いていないことを痛感した。

・かなりの重労働だったけど、少しでも役に立てていたらうれしいと思った。実際に現場を見て、同じ日本なのだろうか疑問に思うほどだった。今日活動を行ったおうちの方は、被災されているにもかかわらず、笑顔で私たちと接して下さり、とても強いなと感じた。子供たちも、形は変わってしまったけれど、以前と同じように過ごしていてすごいなと感じた。ボランティアに行っておいて勇気や元気を与えられた。もっと自分にできることをよく考えて、あと2日、悔いが残らないような活動をする。

【2011年5月18日(水)9:00～15:30】

・今日は昨日とはまた違った活動をした。昨日の家では2階の中ほどまで津波の被害が及んでおり、家には住めない状態だったが、今日の家は2階に住んでおられた。作業は男女で分かれ、男の人たちは力仕事、私たちは窓ふきをした。きれいになった窓や壁を見ると、私たちもなんだか元気が出た気がした。こんなことしかできないのか、と思ったりもしたが、相手の必要としていることをすることも重要なことだと、一緒に活動していた人に言われて、すごく気持ちが楽になった。

・海から約1km離れた場所に位置する家だったが、土砂が残っていた。乾いた砂だったが、家内の隅々まで入っており、拭き掃除をする際にも度々タオルを交換する必要があった。東日本大震災では様々な種類の被害があり、その光景を見るたびに、判断をする(気持ちを切り替える)必要があると感じた。

・昨日よりはるかに動けるようになった。家主さんがフレンドリーに接してこられて、非常に話がしやすく、さまざまなことが分かった。宿泊所にて、ゴールデンウィーク中にもボランティアで石巻に来られた方のお話を聞き、自分たちのありのままの活動が良い成果につながっていくとのことで、この2日間のペースを保つことが重要であることを再認識した。

・やってもやっても終わりの見えない作業に、途方もないことだと、精神的に限界を感じた。チームワークの大切さを改めて感じた。誰よりも動くこと、疲労感を味わうことが、支援をしているわけではない。周りを見て、うまくチームを動かす人もいてこそ、本当に効率の良い作業になる。疲れることで達成感を得られるわけではない。私たちが今やっていることは支援。しかし、本当に被災地が立ち直るためには、被災地の方の気持ちをいかに高めることができるかが、重要だと感じた。

【2011年5月19日(木)10:00～13:00】

・普通に部屋の中に魚の死骸などがあって驚いた。1日目にも水が腐ったような臭いはあったが、比ではなかった。奥に進むにつれて臭いがきつくなって、何度も吐きそうになったが、みんなが頑張っているの、自分もできる限りのことをやった。最後に大家さんと握手したときは、少しでも力になれてよかったと思った。

・近隣の水産加工場から流れ着いた魚が腐敗し、現場ではものすごい悪臭が漂い、おびただしいウジ虫が湧いていた。そのインパクトが強すぎて、ほとんど他のことに頭を使う余裕がなかった。しかし、現場ではそこに住んでおられた方々の残されたわずかの思い出も一緒に残っており、それらをできる限り残しておこうと思った。作業中はいち早く現場を離れたい、帰りたい、しんどいと何度も嘆いた。しかし、後になって考えてみれば、そこに住む人たちは、ずっとそのような環境の中で過ごしていかななくてはならない。被災地をきれい事だけで救うことは、どうやら無理だったようだ。

・近くに水産加工場があったため家の中まで魚が流れこんでおり、それらは腐敗し、悪臭を放っていた。重労働でもあった。アパートの部屋数が多く、時間内に終わるか心配だったが、無事終えることができ達成感があった。今回の活動を通して、自分がやったことはほんとうに小さいことかもしれないけれど、現地の方々にとっては大きな力になれたのではないかなと思う。素人の自分が行って、最初は不安で仕方なかったが、ボランティア隊のみなさんや現地の方々に支えられて、無事終えることができた。また、学ぶことや元気、勇気づけられることも多かった。様々な人に感謝したい。これから自分には何ができるのかよく考えて、この経験を忘れずに生活していきたい。

写真：第2クール アパートの
清掃と泥だし



◆第3クール

主な活動：アパートの清掃と泥だし、公園の危険物の除去・整地

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考	
1	浜田	3年	石倉 康太	イシクラ コウタ	男	
2	浜田	3年	石飛 光章	イシトビ テルフミ	男	
3	浜田	3年	鹿児島 健司	カゴシマ ケンジ	男	
4	浜田	3年	古津 一馬	コツ カズマ	男	
5	浜田	3年	竹内 涼	タケウチ リョウ	男	
6	浜田	3年	長尾 晃幸	ナガオ テルユキ	男	
7	浜田	3年	長澤 亮	ナガサワ トオル	男	
8	浜田	3年	錦織 俊軌	ニシコリ トシキ	男	
9	浜田	3年	松下 崇人	マツシタ タカヒト	男	
10	浜田	3年	松原 治毅	マツバラ ハルキ	男	
11	浜田	3年	吉本 拓司	ヨシモト タクシ	男	リーダー
12	浜田	2年	石橋 佳樹	イシバシ ヨシキ	男	
13	浜田	2年	佐竹 亮祐	サタケ リョウスケ	男	サブリーダー
14	浜田	2年	中川 宗太	ナカガワ ソウタ	男	
15	浜田	2年	吉田 遼	ヨシダ リョウ	男	
16	浜田	3年	大橋 智恵	オオハシ チエ	女	
17	浜田	教員	井上 厚史	イノウエ アツシ	男	同行



【2011年5月24日(火)10:00～15:00】

・初めはだいぶ復興が進んでいるなと思っていたが、アパートのある湊地区に近づくと、まだまだ復興は進んでおらず、道路に車が放置されていたり、家が壊れていたり、震災の傷跡が深く残っていた。アパートも1階はすべて水没しており、家財を出したり、泥を出したりするのがとても大変だった。臭いも強く、特に風呂場に溜まったヘドロを出す作業は一苦勞であった。最初は他人事のように思っていたが、作業を続けると、やはりすごい地震であったことを改めて痛感した。しかし、作業を終えると、依頼主の人が涙を流してお礼を言ってくれた。このような感謝の気持ちはありがたく、何もできていないと思っていたが、役に立ったんだと思った。この感謝の気持ちを明日への活力にしたい。

・初日だったという点と、ここまで被害がひどいという事を認識していなかった点で、最初は手探り状態だった。しかし時間が経つにつれ、順調に作業ができるようになっていった。しかし、なかなかの力仕事だった。ともてしんどかったが、最後のアパートの大家さんの涙を見た時、本当にやって良かったと思った。正直、ここまでハードなボランティアとは思わなかった。

・宮城に入って、車窓から新しいお墓がたくさん目についた。被害を受けて2ヶ月経つので、身元も分かって親族が立てたんだと思うと、心が痛くなった。実際活動した場所では、想像以上の状態で、メディアで見るのとは異なり、大きな衝撃を受けた。結構な重労働で、疲れはしたが、大家さんの感謝の言葉を聞いて、やって良かったと思った。また明日も頑張りたい。

・正直、最初に宮城県石巻市の現状を目にした時、自分は別の国、世界にいるのではないかと思った。被災地は本当にすごかった。これを片付けるのに、あとどのくらいかかるのだろうか...と思った。私たちがやった場所は、被災地全体からすれば、ごくわずかな場所。しかし、私たちが片付けたアパートの家主さんは、涙を流してお礼を言って下さった。そこで初めて、自分は今被災地にいるのだと実感した。これから2日間、できることをやりたい。

【2011年5月25日(水)10:00～16:00】

・前日の作業は重労働がほとんどだったが、今日は、公園内に一時的に集積していたガレキなどの後片付けを行った。大きな物は全部撤去されてはいたが、土の表面や中に、ガラス片などが大量に混入している状態で、子供たちが遊ぶには大変危険な状態だった。小さなスコップを用いて地道に作業することは、精神的にも厳しかった。だが、作業中に、下校中の女子中学生からの「頑張ってください」という声かけには、非常に励まされ、うれしく思えた。作業後にはたくさんの小学生が公園に集まり、遊ぶ姿を見ていると、本当に良かったと思った。

・一日目の仕事内容とはずいぶん変わりましたが、子供たちの大切な遊び場を、まだ半分ほどですが、きれいにできてよかった。子供たちの笑顔も輝かしかった。被災地視察は、初日に見た光景よりもよりすさまじい光景が広がっていて、言葉が出なかった。ああいう光景を見ると、もっと全国からのボランティアが必要だと思う。

・昨日よりも大変な作業だったが、活動を終えたあと、子供たちが遊んでいるのを見ると、やってよかったと思った。しかし、まだまだやりきれなかったところがあるので、明日はそれらを終わらせ、子供たちが安心して遊べるようにしたい。海岸線の被災地を視察したが、津波・地震の恐ろしさを目の当たりにして、言葉が出なかった。復興は進んでいても、終わるのはまだまだ先ようだ。

・子供たちが自然に遊べるように、公園内に落ちていたゴミやガラス等の撤去を行った。単純な労働だったが、腰が大分痛くなった。長時間同じ姿勢だったせいだろうか。広い公園だったので、時間内に終わるか不安だったが、半分以上の作業を終えることができて良かった。作業終了後には、津波の被害が大きかった海岸線へ向かった。それは想像できないくらい悲惨だった。改めて、ボランティアに参加する意義を確認できた。

【2011年5月26日(木)9:00～12:00】

・昨日と同じ活動内容でしたが、最後の活動ということで真剣に取り組めました。一般の方とのコミュニケーションを取れてきたので、まだ一緒にやりたいとも思い、少しさびしい気持ちになりました。これで災害ボランティアとしての活動は終わりですが、大学に帰っても、私にできることを考え、行動していきます。

・昨日と同じ作業だったため、効率良く作業ができた。今日は、社会人団体 NIPPO の新入社員を中心としたボランティア隊の方々と活動することになった。社会人の方と同じ場所で活動する機会というのはなかなかないので、プロの作業に見とれてしまったが、同じ「島根県災害ボランティア隊」で活動している人ともいろいろな話をすることができて、楽しく作業できた。今回の3日間で体験したことを大切にして、今後の自分の活動に役立てたい。最後に、ボランティアに参加して本当に良かったです。ありがとうございました。

・昨日に引き続き、公園内の掃除が今日の活動だった。今日はボランティア最終日だった。最初は僕なんかが行って力になるかという気持ちもあったが、他のボランティアの人たちの活動、現地の人たちなどを見て、個々人の力は本当に小さなものかも知れないが、こういった力が集まり、復興という大きな力になるのだなあとと思った。ほんの数日だったが、現地の人々の感謝の言葉で、こんな自分でも少しは役に立ったのかなと思った。

・今日一日で終わるとなるととてもやりきれない気持ちになり、全力で最後までやり切ろうと強く思った。体力の全てを注ぎ、自分が目標としていたことを達成することができた。3日間で学んだものはたくさんある。それは言葉にできるものもあるが、できないものもある。しかし、実際に現実に後悔は全くない。全てが勉強で、全てが経験であった。現地の人々の思いや状況を、離れた島根県の人に伝えていくということが、最後の仕事だと思っている。

◆第5クール

主な活動：お寺の駐車場の泥だし、側溝の泥だし

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田 3年	尾崎 萌美	オザキ モエミ	女	
2	浜田 3年	鬼城 博太	オニキ ヒロタ	男	サブリーダー
3	浜田 3年	高橋 勇人	タカハシ ユウト	男	リーダー
4	浜田 3年	本澤 和香	モトザワ ノドカ	女	
5	浜田 2年	石川 世菜	イシカワ セナ	女	
6	出雲 3年	中河 美帆	ナカガワ ミホ	女	



【2011年6月14日(木)9:00～16:00】

・初日はバス移動の後の作業だったので、とても疲れたように感じました。水分を含んでいるヘドロはとても重たくて、さらに時間がたっていたためか、硬くなっている部分もありました。そのヘドロをくずして、集めては土のう袋に詰めるという単純な作業でも、どうやったら効率よくできるのかと、考えながら作業していました。途中で近所の人に声をかけてもらった時は、とても嬉しく思い、ボランティアに来てる私たちが元気をもっているなど、改めて思いました。

・とにかく初日で、しんどかった。今回のボランティア活動の初めての任務が広い敷地のドロ出しだったため、ゴールが見えず、モチベーションを保つのが大変だった。今日一日ではやり遂げることができなかったため、少し心残りだった。すれ違う現地の人々が“ありがとう”や“お疲れ様でした”という言葉をかけてくださって、現地での人々の前向きなパワーを感じた。私の小さな働きが現地の人々の役に立っているのかなと思うと同時に、まだまだやれていないのに、と複雑な気持ちになった。

【2011年6月15日(木)9:00～16:00】

・初めは前日と同じ作業をしたのですが、自分達の班の効率性と役割分担を褒められて、違う場所へ移り活動。小学生が校庭で遊んでおり、ケガをする可能性もある場所でもあった。そのような場所には重機を投入して、一刻も早く安全なところにしなければならないと思う。重機も足りず、人も足りていないので、3ヶ月たって、ようやく私たちが取り組んだ。そのような場所は多々あると思う。お金や物資だけでなく、人が足りていないというのが現状である。

・粉塵が舞えば、すぐ近くで遊んでいる子供たちにも悪影響だと考えると、きれいにしたいという強い思いになった。土がとても固かったので、クワで掘り起こした。腰と肩がとても痛くなった。乾いた土だったので、注意を払って作業をした。途中子供たちがフェンス越しに“頑張ってください”と声を掛けてくれて嬉しかった。子供の楽しそうな声を聞きながらの作業はとてもはかどった。途中班員で手のマメがつぶれた人がおり、痛そうであったが、“マメがつぶれて嬉しいと思ったのは初めてだ”と言っており、私も嬉しくなった。

【2011年6月16日(木)9:00～13:00】

・震災ボランティア最終日は、隊の団結力の向上により、新しい作業内容にもかかわらず、一日でやり遂げるべき側溝清掃の距離以上の側溝をきれいにすることができた。また、地元の人々もたくさん出て

きてくれて、地域間交流的な雰囲気の中で作業を進めることができたと思う。小学生の子供も一緒に作業してくれ、ボランティアセンターでの報告会にも来てくれ、隊全員に向けたお礼の手紙をくれた。とても感動するとともに、逆に私たちが元気づけられた気持ちでいっぱいになった。ボランティアはお金では買えない大切な体験や経験を得られるとよく言われるが、今日の作業はその言葉通りの作業であった。これからも支援を続けて行きたい。

・側溝の泥だしをする際に、まず道路が地震によってゆがんでいて、一見普通に生活しているように見えるが、想像を絶するほど大きな影響を受けたのだと改めて実感した。作業はヘドロに水分が多く含まれていたため大変でしたが、そこに住んでいる住人の方々が、“見てるだけでは申し訳ない。これくらい手伝わせてください。”と言って、一緒に作業をしてくれた。ボランティア活動に参加している私たちよりも、現地の人たちはこの大震災に向きあって、今後のことをしっかり考えていて、心を打たれた思いでいっぱいになった。

【お礼の手紙】

「今日来てくれたお兄さん、お姉さんへ

今日は、水明町のみんなのために、いっしょけんめいかたづけをしてくれて、本当にありがとうございました。テレビでボランティアという活動は見た事はあったけど、初めて目の前でいっしょけんめい動いているすがたを見て、感しゃの気持ちと感動させられました。じしんとつなみでとても怖い思いをしたけれど、お兄さんやお姉さんのすがたを見て、がんばろうと、勇気がわいてきました。

島根県から来てくれたのも、パパが2年間島根にいたことを思い出し、すごい縁だと思いました。お兄さんとお姉さんに出会えた事も縁だと思います。わたしも大きくなったら、お兄さん、お姉さんのように、心がやさしい人になりたいです。今日は本当にありがとう。」

左下写真：第3クールによる
公園の整地作業

右中写真：第5クールによる
側溝の泥だし作業

右上写真：第6クールによる
側溝の泥だし作業



◆第6クール

主な活動：植え込みのヘドロ撤去、側溝の泥だし

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考	
1	浜田	4年	小島 美佳	コジマ ミカ	女	サブリーダー
2	浜田	4年	下浦 舞子	シモウラ マイコ	女	リーダー
3	浜田	2年	小川 千尋	オガワ チヒロ	女	
4	浜田	2年	永田 江里奈	ナガタ エリナ	女	
5	浜田	2年	長谷川 順一	ハセガワ ジュンイチ	男	
6	浜田	2年	本田 拓也	ホンダ タクヤ	男	
7	浜田	2年	三賀森 貴弘	ミカモリ タカヒロ	男	
8	浜田	2年	芳林 秀則	ヨシバヤシ ヒデノリ	男	



【2011年6月21日(火)10:00～16:00】

・移動も重なり疲れた。だけど作業の途中で“頑張ってください”と声をかけてくださったりして頑張ろうと思った。ふと周りを見ると普通に生活している地元の方もいて、ここまで戻るのに相当な苦労があったのだと思った。こうして生活を取り戻しつつあるのを見て人間の力はすごいと思った。

・乾いたヘドロが粉塵となって舞っており、ゴーグルをつけていない時は目に違和感を覚えた。あちこちに流れてきた魚が干からびており、臭いも多少あった。ハエが多かった。掘っても、掘ってもヘドロが出てきてきりが無いように感じた。また、雨宿りをしている時、近くの男性が差し入れをくださった。途中、雨も降ったがやれることはできたと思う。

・ひとつの場所をきれいにするのでも大変だった。1日かかっても1カ所と半分くらいしか作業が進まず、多くのボランティアが必要だと改めて思った。近所の人に溝も埋まっているので取ってほしいと言われた。実際、雨が降ったあと水が流れず水たまりができていて、これも誰かがしなければいけないんだなと思うと現地の大変さが少し見えた。

【2011年6月22日(水)9:00～16:00】

・重労働やその他複雑な作業を行うためには、自分だけの力ではどうにもならず、多くの人の手を借りて、協力しながら行うことが非常に重要なことであるということが改めてわかった。日中の暑さの中で、作業をしている私たちを気にかけてくれる近所の方々の心温かさがすごい伝わってきた。この場にいることによってしか得られないことが、今日獲得できた。

・他県から来たボランティア団体の方と一緒に除去したが、手際のよさに見とれるばかりだった。天気が良く、暑さも厳しかったが、近所の方に差し入れを頂くなどで元気が出た。やはり近所の方と関わった方がモチベーションを上げることができると思った。被害のひどい地域を見させていただいたが、当時の状況を想像でき、今回の被害の酷さが実感できたような気がした。現地の酷さ、大変さは行ってみないとわからないと改めて思う。

【2011年6月23日(木)】

※雨天のため、ボランティア活動中止

(3) 陸前高田市「島根県災害ボランティア隊」プランⅠ

主 催：社会福祉法人島根県社会福祉協議会（会長：今岡義治）

受 入 先：陸前高田市災害ボランティアセンター

場 所：岩手県陸前高田市

期 間：第1クール 2011年8月17日（水）～21日（日）

第2クール 2011年8月24日（水）～28日（日）

【行程表】*各クール共通

第1日（水）	10：15	浜田キャンパス出発～県大公用車で移動（出雲、松江経由）
	14：00	いきいきプラザ島根着（受付）
	14：15	出発式
	14：30	いきいきプラザ島根出発～大型バスで移動（車中泊）
第2日（木）	8：00	陸前高田市災害ボランティアセンター着
	9：00～14：00	ボランティア活動
第3日（金）	15：00～	宿舎着(食事・宿泊)
	7：30～ 8：30	陸前高田市災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～14：00	ボランティア活動
第4日（土）	15：00～	宿舎着(食事・宿泊)
	7：30～ 8：30	陸前高田市災害ボランティアセンターへ移動
	9：00～14：00	ボランティア活動
第5日（日）	14：00～16：30	陸前高田市災害ボランティアセンターへ移動・手続き等
	16：30	陸前高田市を出発 ～大型バスで移動（車中泊）
	10：00	いきいきプラザ島根着
	10：15～11：00	解団式
	11：00	いきいきプラザ島根出発～県大公用車で移動（松江、出雲経由）
	14：30	浜田キャンパス着

◆第1クール

主な活動：草刈り、瓦礫撤去

	キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	3年	鬼城 博太	オニキ ヒロタ	男	リーダー
2	浜田	3年	徳村 泰弘	トクムラ ヤスヒロ	男	
3	浜田	1年	川瀬 千佳	カワセ チカ	女	
4	浜田	1年	山岡 賢太	ヤマオカ ケンタ	男	
5	松江	1年	杉原 康太	スギハラ コウタ	男	サブリーダー
6	松江	1年	田部 天裕	タナベ タカヒロ	男	
7	出雲	2年	青山 沙紀	アオヤマ サキ	女	サブリーダー
8	出雲	2年	石倉 彩花	イシクラ アヤカ	女	
9	出雲	1年	佐々木 香苗	ササキ カナエ	女	
10	出雲	1年	佐藤 美帆	サトウ ミホ	女	
11	出雲	1年	中村 気恵	ナカムラ キエ	女	



【2011年8月18日(木)9:00～13:00】

・今日は、陸前高田市に朝到着し、実際に被害状況を見てテレビや新聞で見た以上に被害のすごさを実感しました。瓦礫は大分片付いていたのですが、持ち主が見つからずに放置されていた車や被害を受けたまま残っている家を何度も目にして、まだまだ復興には時間がかかると思いました。今日の作業内容は、草刈りと瓦礫撤去でした。雨の中の作業でしたが、自分の体調に注意しながら一生懸命作業ができました。草刈りは、ずっと腰をかがめながらの作業だったので、かなり腰に負担がかかり疲れも溜まったので、また明日から万全の体調で作業できるように、今日はしっかりと休みたいです。

・今日、初めて岩手県に来た。自然の多いところだと感じた。しかし、被害の大きかった海岸沿いに行くと、なんとも言えない臭いがしてきて、臭いなあと感じた。流された家、車、会社などそれらの量があまりにも多くて、津波の恐ろしさを感じた。大切な人、大切な物、大切な環境を失ってしまった人々の心の辛さを考えたとき、胸が痛くなった。1日も早く、人々がそれぞれに「幸せ」だと感じられる社会になってほしいと思った。

・今日の活動では、草刈りをさせてもらった。私たちボランティア隊がきれいにした土地が、この先どのような形で地元の人々に使われていくのかは知らされていないためわからないが、有効に使われるといいなあとと思った。ボランティアをしながら思ったことは、ボランティアは止めるべきだと言う人がいるが、やはりそれは間違いだということだ。誰かが苦しんでいる時に助けたいと思うこと、誰かを幸せにしたいと思うことは、人間として持っているのが普通な感情だと思ったからだ。そのため、このボランティア活動に参加したことが、間接的ではあるが誰かを幸せにしていると気づいた時、この活動を行えることに感謝だと思った。

【2011年8月19日(金)9:00～13:30】

・今日は昨日より雨は降らず、作業しやすい天候だった。人骨らしきものが見つかったのが驚いた。終わった後、バスで南三陸町、石巻市へ視察に行き、現状を見てきたが、まだまだ被害がひどく復興には時間がかかると感じた。

・昨日は、自分一人で黙々と作業をこなしていたため、今日は違う環境でできて良かった。皆で声をかけ合いながらこなす作業はとても良いものだなあと感じた。また、昨日は終盤になると体力が無くなり、あまり手を動かすことができなかったが、今日は時間を忘れるほど熱中して作業をこなすことができた。

・今日の作業はとても達成感を覚えるものとなった。また、今日は、作業が終わってから、南三陸町に行くことができた。災害ボランティアに来て思ったことは、これから私は10回、20回、30回と何回来てもまだまだ支援は必要だということだ。私の地元とこの岩手、宮城の現状を比べてみると、その生活環境は天と地ほどの差がある。目を疑ってしまうような光景がいたる所にあった。

震災直後のTVでは、津波の様子が放送されていたため、恐ろしいなあとという意識はあったが、実際に建物の有り様を見てみると、本当に日本はなくなってしまうかと思ってしまう程、被害は大きかった。津波…地震と、天災は本当に恐ろしいものだと思った。今ある環境、今ある生活、全てのものに日々感謝して生きなければいけないと感じた。

【2011年8月20日(土)9:30～13:00】

・最終日は、晴れて気温も高くなり、作業するには非常に大変な気候でした。3日目なので体力があま

りなく、ペースは落ちてしまいました。しかし、自分たちの作業したスペースを見ると意外に広いなと思いました。作業を終えて現地の方と話した時に、当時の津波の恐ろしさを聞いて身震いがしました。・今日はいよいよ災害ボランティアに来て行う最後の活動となった。現場はすっかりと草の山がたくさんできあがり、達成感がかなりわいてきた。活動では、草をなるべく一箇所にとどめるという作業を行った。すごい草の量だった。活動をしていてかなりの人数の人が復興のために活動しているのを見て、涙が出た。日本のみんなが何かを通じて東北を支援しているんだ。皆が赤の他人の幸せを祈って動いているんだ。繋がっているんだと感じ、嬉しく感じたからだ。

活動後、被災された人から津波の様子を聞くことができた。話していて辛いのではないだろうか？と感じた。しかし、広田町の人達は、苦しみを乗り越えて、もう復興に向かうしかないという前向きな思いになっているのだと思った。私はそんな彼らのことをすごく好きだと感じた。苦しみは忘れるのではなく、苦しみは自分のものにする。それを行っていかないと人は成長できないと思っているからそう感じた。このボランティアに参加することができてとても幸せを感じる。微力な私でも、自己満足でもしょうがないと思う。しかし、被災地の人をサポートできたと感じている。

波に大事なものを全てさらわれてしまって、その苦しさを理解してあげることにはできないが、私は彼らのことを一生支援し続けようと感じさせられた。このボランティアに来たことで、より強く日本は繋がりが合わなければならないことを再確認した。本当に来て良かった。ここに来る前、実家に久しぶりに帰った時、家族に不平不満を言うてしまうことがあった。しかし、家族さえも幸せにすることができない自分に、被災地の人々を支えることはできないとそう感じた。これからの生活、周囲の私の身近にいつもいる人々のことをもっと愛し、それらの人が私といると幸せだなあとそう感じてもらえるような人になっていく必要が以前より強く求められているなあと感じた。

写真：第1クールによる草刈作業



◆第2クール

主な活動：牡蠣の貝殻と瓦礫の仕分け

キャンパス	学年	氏名	フリガナ	性別	備考
1	浜田	3年 青木 勇樹	アオキ ユウキ	男	
2	浜田	3年 鬼城 博太	オニキ ヒロタ	男	
3	浜田	3年 古津 一馬	コツ カズマ	男	
4	浜田	3年 高橋 勇人	タカハシ ユウト	男	リーダー
5	浜田	3年 中ノ瀬 寛明	ナカノセ ヒロアキ	男	
6	浜田	1年 宮野 稔生	ミヤノ トシキ	男	
7	松江	2年 坂本 光市郎	サカモト コウイチロウ	男	サブリーダー
8	松江	1年 飯塚 裕子	イツカ ユウコ	女	
9	松江	1年 太田 映瑠	オオタ ハユル	女	
10	出雲	3年 東野 彩	ヒガシノ アヤ	女	サブリーダー
11	出雲	1年 今岡 朱里	イマオカ アカリ	女	
12	出雲	1年 下原 朋代	シモハラ トモヨ	女	



【2011年8月25日(木)13:00～14:00】

- ・途中、事故があつて作業時間が短くなりましたが、非常に大変でした。臭いがあり、貝にヘッドロが付着しており、細かな作業になりました。
- ・漁業の方達の働く姿を見て、また、実際に被災地を訪れてみて、思っていたよりも被害が大きく、大きなショックを受けました。今回のボランティアを通して被災地の方々に少しでも多く役立つことができれば幸いです。
- ・昨日からあまり寝ていないこともあり、最初は大変だったが、被災地の現状を生で見て眠気も吹き飛んだ。今日は1時間しかできなかつたけど、その1時間は真剣に取り組み、少しではあるが、貝とゴミの仕分けができて良かった。

【2011年8月26日(金)9:30～14:00】

- ・今日は、一日中の活動でした。なので、より多くの活動ができ、山のようにあつた貝とガレキを半分以上減らすことができました。明日からもまた頑張りたいです。
- ・昨日と同様に貝殻とガレキの分別作業で、とても大変だった。先が見通せない作業内容なので、モチベーションを上げていけるように最終日も頑張りたい。
- ・今日は、30分ごとの作業でしたが、長時間かがんでのことでしたので、腰が痛くなりました。しかし、こうしたささいなことでも支えになるのであれば良いかと思いました。

【2011年8月27日(土)9:30～12:30】

- ・作業3日目ということで、メンバー全員が自分のできることを見つけ率先して作業を行うことができたと思う。天候も良く作業しやすい状況であつた。最後に漁港のみなさんと写真撮影させてもらったり、お話ができ、互いに元気をもらえた気がする。また、機会があればボランティアに参加したい。そして、10年後復興した町を見に行きたいと強く思う。

・最終日は、とてもあっという間に過ぎました。この3日間を通して自分の無力さを知ることができました。また、現地に赴くことにより、メディアを通しての情報より、震災による被害や現地の人達の復興にかける思いなどを痛感することができたと思います。今後、このようなボランティアには積極的に参加していきたいと思います。

・今日の作業は慣れてきたこともありましたが、同じボランティアとして参加された方と話をしながらだったため、非常に短く時間が感じました。今回のボランティアを通して漁港のみなさんの温かさや、今回参加されたボランティアの方々と気持ちを共有できたことは非常に良かったです。

写真：第2クールによる牡蠣の貝殻と瓦礫の仕分け作業

